

鈴木善治は探偵～オンボロアパート風雲録～

あずきシティ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼はどこにでもいる高校生、鈴木善治。

そんな彼の冒険が今、始まる！

と

そんなつもりでもなかったのになぜか巻き込まれる。

彼のアツイ夏が（半ば強制的に）始まる！

ちなみにこの作品は私が2012年に書いたものになります。

ゆえにすでに完結済み。3日間隔で投稿していきますのでよろしくお願いします。

目次

鈴木善治は探偵！	1
鈴木善治は容疑者!?	3
双電交通というバス	5
アリバイの証明	9
引越し	13
事件現場とホームレス	17
見つからない容疑者	20
大家さん	23
消えた凶器	25
血塗られたアイスピック	29
見えた犯人像	31
事件の真相	34

鈴木善治は探偵！

俺はさすらいの高校生探偵、鈴木善治だ。

なんてな。俺は夏休みを利用して旅に出ることにした。宿題をしたくないというのが本当の理由だが表向きは自分磨きの旅だ。だが旅も四日目にして財布の中はほとんど空っぽ。歩きで移動してもこなうってしてしまうのだから俺の金遣いの荒さに問題があるのかもしれない。

時刻はだいたい夜の11時ごろだった。閑静な住宅街はもう寝静まっている。

バス停のベンチで寝ようと思ったがすぐにバスがやってきた。運転手の女性は

「終バスですよ」

と言うが

「すみません、乗らないです。」

と答えると

「じゃあ、悪いのですがここはバス停ですので申し訳無いですけど……」
だいたい、言いたいことは分かる。運転手の女性が悪くもないのに謝る姿を見て気の毒になった俺は運転手に謝って、仕方なく俺は近くの公園のベンチで寝た。

旅の恥もなんとやらだ。知ってるやつなど誰もいないのだし気にするな俺。

夜中の3時ごろ。俺は目が覚めた。公園のベンチだからということもあるだろうが何より雨が降りだしていたのだ。俺は雨宿りする場所を探したが見つからない。しばらくうろろしたのち俺は一件のアパートを見つけ仕方がなく他に開いてる店なども無さそうなのでこの廊下に避難した。

時刻は早朝の4時くらいだったと思う。

よく考えたらアパートの廊下にいるということは住居不法侵入だよな。誰かに見られるとまずいな。だが雨に打たれたくもない。考えものだ。なぜ傘を持たなかったのだろう。

30分くらいぼんやりとアパートの階段に腰かけていたが一応、上の方まで行き人が住んでるか確認しようと思った。

アパートは二階建てだしあまり人の気はしない

二階に上がるとドアが全開されている部屋があった。何故、全開されているのだろうか。

好奇心が俺を突き動かす。

気付いたら部屋の前に俺はいた。

なんとなく部屋を見る。もちろんアパートの廊下からだぞ。

すると目の前、玄関に人が血溜まりに横たわっていた。俺は家に一歩足を踏み入れ人なのかどうか、そして生きているのか死んでいるのかを確認しようとした。お世辞にも若いとは言えない50歳くらいの男女だ。近くにはナイフが落ちている。どうやら凶器はこのナイフだろう。不思議にも俺はこの時、冷静だった。似たような場面を見たことがあるからな。だが今回は訳が違うらしい。とりあえず警察を呼んだ方が良い。俺は携帯の電源を立ちあげ電話しようとした。なぜ電源を切ったかというと長旅のつもりだったから緊急時以外に携帯を使うつもりがなかったからだ。だがこれは緊急時だ。

俺がカバンから携帯を取り出そうとしていると真後ろの廊下から声が聞こえた。

「ひっ……人殺し!!」

振り返った俺が見たのは新聞配達員だった。しまった。もうそんな時間か。

新聞配達員はすぐに走って逃げ出し呆気にとられていると今度は通報を受けたらしい警察官が現れた。

第三者から客観的に見て俺が犯人だよな。まあ仕方無い。結局、俺は無実なのだがこの場では成す術がなく逮捕され交番に連行された。アパートの近くに交番があり走れば30秒で来れる距離だった。

鈴木善治は容疑者!?

俺は警察官から取り調べを受けた。

名前、住所、その他もろもろ。

恐喝はされなかったが警察官は俺を疑ってるらしく何度も

「君がやったのじゃないのか?」

と聞いてきた。

結局、警察官の方が折れたらしく

「明日には刑事が来る。悪いがそれまではこの交番にいてもらおう」

と言われた。今日の宿は交番のようだ。家族には俺から連絡した。

家族は心配こそしているようだが俺が犯人ではないと信じてるらしくゆっくり無実を証明して帰るよう言われた。

交番はちつぽけで俺は床に雑魚寝する事になった。カツ丼の一つくらい出してくれるかと期待したがそういうことも無く夜は更けていった。

「おい!起きろ。」

昨日の若い警官の声で俺は起こされた。

そのまま顔を洗うことも許されずに刑事のもとに連れていかれた。刑事の顔は寝ぼけててよく分かんが金髪だ。美人だったりするか気になるところだ。警官は刑事に何か言っている。

「新聞配達員から通報を受け本官が容疑者の身柄を確保しました。」

やれやれ。俺は無実の罪でもう容疑者らしいな。

「あら?素敵な男じゃない?んふふ」

刑事の声が聞こえる。言っている内容は良いのだが声が男に聞こえる。眠たい目をこすりながら刑事の警察手帳を見せてもらった。

金田真一 刑事

俺は寝ぼけていたためそのまま読んだ内容を口に出した。

「きん…た…ま…い…ち…けい…じ…」

後々考えれば我ながら何とも酷い読み方をしたものだ。

「いやあくね。一じゃないわ。ゼロよ!んもー!何言わせるのよ!」

世の中には変わった刑事もいるものだ。

「……って待て。もしかして……オカマ……?」

「そうよオカマよく。なんか文句ある?」

その「なんか文句ある」という声は下手なチンピラより怖かった。

「いえ……別に。」

「あたしのことはローズ刑事って呼んで!」

「……………はい……………」

本当に変わった刑事もいるものだ。

「金田刑事」

警官が何か言いたそうに刑事に話しかけた。

「ローズ刑事とお呼び!!でどうしたの?」

「失礼しました。ローズ刑事。この男は夫婦を殺したんですよ!」

「いやあーね。こんないい男がそんなことするわけないじゃない。私は彼を信じるわ。ただ現場に居合わせたただけよーん」

変わった刑事だが俺の味方をしてくれるらしい。

「まあ、あんたも疑いはあるんだからしばらくこの町で暮らしてちょうだい。あたしのポケットマネーをあげるわ。生活費にでも充てて。いい?この町から出ちゃダメよ?」

案外、すっかりした刑事らしく一応、俺のことも疑っていやがる。

「あたしはいつでもこの交番にいるわ。暇だったら来てね」

刑事には悪いが交番にはあまり来たくないな。

「この裏にあすなる荘という建物がある。しばらくはそこに住んでくれ。大家さんには私から言っておく」

警官はそう言いながら俺に鍵を渡した。どうやらしばらくはこの町にすることになるらしい。

俺は与えられた あすなる荘 に行き何がどうなってるかを考え直すことにした。

「くれぐれもこの町からでないように!」

警官よ。そればかりしつこいぞ。

双電交通というバス

警官はそう言いながら俺に鍵を渡した。どうやらしばらくはこの町にしていることになるらしい。

俺は与えられた あすなる荘 に行き何がどうなってるかを考え直すことにした。

「くれぐれもこの町からでないように！」

警官よ。そればかりしつこいぞ。

俺はしばらく寝床になるであろうあすなる荘に入った。

なんとも小さな部屋だ。とりあえずこの部屋には寝に帰るだけになりそうだ。何より俺の無実を証明しなければ。俺が殺った証拠がなければ俺は捕まらないだろうがそれでは俺の無実も証明されない。夏休みの内に旅から帰りたいからな。さっさと解決しないといけない。

しかし、何が証拠になるのだろうか。

というか俺の無実を証明しただけでは気分が悪いな。仕方無いな。名探偵のこの俺、鈴木善治が事件を解決してみせるぜ。

そうは思ったがそもそもどうなってドアが全開なまま玄関先で倒れているような事が起こるんだ？

強盗が押し入った。と考える物取りの犯行が妥当だろう。だがそれなら何故、夫婦が同じ場所、それも玄関先なのだろう？まさか心中か？

可能性として帰ってきた夫を妻が殺しそのまま自殺したと仮定すれば話は繋がるかもしれない。

腹が減ったな。昼時だしそもそも俺は昨日からなにも食べていない。俺は外に出る。

昔のままのような懐かしげのある定食屋があるのでそこに入ろうとしたが鍵がかかっている。まさか昼時にも関わらず閉まっているのかと思いきや中から声が聞こえた。

「殺人犯に食わせる飯はねえ！」

まさかな、俺は無実を証明しない限り店にも入れないのか？

予想は当たっていたらしくこの町にある飲食店のうち定食屋、串カツ屋、焼肉屋、居酒屋では入店を拒否されお好み焼き屋にしか入れなかった。無実を証明するまではお好み焼きしか食べられないらしい。仕方無くお好み焼きを食べた後、俺は交番に行った。ローズ刑事はおらず警官だけだったが。

「あの……事件について聞きたいのですが」

警官は俺のことを疑ってるらしいが質問には答えてくれた。

情報をまとめると死亡推定時刻は夜11時で死因はナイフで刺されたことによる大動脈断裂ショック、被害者はその部屋住んでいた夫婦らしい。

夜11時が死亡推定時刻ならその時間のアリバイを証明すればいい。俺は事件当日の夜11時を思い出した。

確か旅で疲れバス停で寝ようとしたがバスが来て追い出された……。

バス!? 確かあのとき、運転手に話しかけられたはずだ!

俺はすぐ例のバス停に行った。

バス会社は「双電交通」という聞いたことのないような会社でどうやらこの辺りで細々と生計を立てるバス会社のようなようだ。するとバスが来た。がらがらで誰も乗ってない。経営的な意味で大丈夫なのか？

運転手にアリバイ証言を頼みたいが仕事中に無理矢理、交番に連れて行くわけにもいかない。

とりあえずバスに乗る。

約10分程で終点に。

俺は運転手に話しかけようとしたが……ん? 事件当日と運転手が違う。あの時は暗くてよくわからなかったが女性だったはずが今日はサングラスをかけた怪しげなオッサンになっている。

「すいません。一昨日の終バスの運転手さんを探してるんですが……」

運転手は意外に温和らしく気さくに答えてくれた。

「そつたらこつたあ知らねえつぺ。営業所さ行けばわかるだ。どけんしたと?」

「その終バスの時間に起きていた殺人事件で俺が無実の罪を着せられてしまったんです。アリバイ証明のために一緒にその運転手さんに交番まで来てほしいんですが……」

「それは大変なことだ!んく次の折り返しまで40分……このバスで営業所まで送つたるだ!」

「え?大丈夫なんですか?」

「40分で帰れば大丈夫だ!それより君が殺人犯のままなことの方が問題だ!」

俺は運転手の厚意に甘え営業所まで送ってもらった。

「そういえば運転手さん、あなたはなにをしていたのですか?」

「オラは別の路線の終バスを担当してただ。確か君の言う事件があった30分後にアパートの前の道を走るバスだ」

バスの車内でした会話と言えばこれくらいだ。

割りとすぐ営業所に着いた。運転手に礼を言つたあと俺は営業所内に飛び込んだ

「すいません!一昨日の終バス担当の方はいらしゃいますか!?!」

「営業所にいた人全員に驚かれたのは言うまでもない。」

「かくがくしかじかこれこれで一昨日の終バス担当の方を探してるんですが」

「営業所のわりと偉いくらいにいそうな人が答えてくれた。」

「どの路線か分かりますか?」

「しまった。分からないぞ。」

「あるいは現場がどこか分かりますか?」

俺が事件のあったアパートの名前を言うと

「それってアパートの真ん前かその近くにある公園の前の道を走るバスか分かるかな」

「公園の前の方です。」

「じゃあその路線の終バス運転手なら今日は夕方から乗務だが……出社してもらったらしばらく運転だからなあ」

俺はがく然とした。アリバイ証人と予定が会うまで容疑者を続けなければならぬらしい。見たところ、双電交通は社員もギリギリらしく有給休暇などはなさそうだ。

「もう出社してくる時間だ。交番に寄り道してもらおうか？」

営業所のお偉いさんはそう言い出した。

「え? いいんですか?」

「まあ良いだろ。君の将来のほうが大切だ。時間には余裕をもって出社するよう言ってるしな」

「でもバスの運行に支障が出るんじゃないや……」

「まあ手短にすませてくれれば大丈夫だろう。彼女には私から電話しておくから君は交番に行きなされ。」

「あ……ありがとうございます。」

話がうまくトントン拍子に進む。普段の行いが良いからだろうな。

アリバイの証明

交番に着いた俺を待っていたのはいつもの警官とローズ刑事だけで運転手の人はいなかった。まさか騙されたのか？方一、営業所のお偉いさんが犯人なら俺を容疑者にしておいた方が良くから騙す可能性もある。だが俺は信じてとりあえず警察にありのままを伝えることにした

警官はやはり俺を疑ってるらしい。まあ見たところ平和な町だったようだし手柄が欲しいのかもしれない。今に見てろ。その鼻を挫いてやるぜ。

「どうした？やつと自供する気になったかね？」

一方、ローズ刑事はというと

「あら？あたしに会いに来てくれたのかしら？」

あながち間違いでは無いかもしれんが、まともな警察はいないのか？

「今日は俺のアリバイを証明しに来たんだ！」

「なら聞かせてもらおう。」

「俺はあの日の死亡推定時間に、公園前のバス停にいたんだ！」

「確かに公園前のバス停とあのアパートのは走っても10分はかかる。最初の取り調べの時に言っていたようにさ迷いながら夜中の4時にアパートに着いたとしたならば話は噛み合う。でもそれを証明出来るのか？」

「俺は終バスの運転手に話しかけられたんだ」

「終バス……あ、23時05分にあるな。で、その運転手さんは？」

「交番に来てくれると言っていたのだが……」

ローズ刑事はさすが刑事だ。普段の言動こそおかしいが俺の証言に耳を傾けてすべてメモをとっている。

するとその時だった。

「すいません！双電交通の板倉です！」

ローズ刑事が応対した。

「何よあんた！あたしの彼の彼女!？」

「違います。所長から言われてきたんです。ここにいる青年を私は23時05分に公園前のバス停にいらっしやるのを見て会話もいたしました。それを証言しに来ました！」

警官が即座に反応する。

「なんだって！それは本当か？」

「はい、事実です。疑わしいなら双電交通営業所に言っつて乗務記録を見せてください。」

「……刑事……。どうですか？」

「うーん。なんか読めない目をしてるわ。まあ嘘ついたらどうなるかなんて分かってるんだから信じてあげてもいいんじゃないかしら？」

「……そうですか……。えーと……」

「板倉さんって言ったかしら。名前と電話番号だけ書かせてちよーだい」

なんか俺だけかやの外だがまあ俺の容疑は晴れたんだよな？ 散々、犯人扱いされてこのまま食い下がる訳にはいかない。

「ちよつと待てよ！俺の容疑は晴れたんだよな？」

「はい。」

「今まで散々、俺を犯人扱いしておいてその態度は何だ？俺の傷付いたハートはどうしてくれるんだ！」

俺が声を荒げるとローズ刑事が

「やーん、これあげるから許してちよーだい」

と「慰謝料」と書かれた封筒を渡してきた。よし、狙い通りに金を手に入れたぞ。まあ後で中身を見てわかったがジュースを2本くらい買うとなくなる金額だった。

「あ、君。」

警官が誰かを呼んでる。

「君だよ君。」

俺のことのようだ。

「ちよつと奥まで来てくれ。」

俺は言われるがままに交番の奥に行った。

引越し

「あ、君。」

警官が誰かを呼んでる。

「君だよ君。」

俺のここのようだ。

「ちよつと奥まで来てくれ。」

俺は言われるがままに交番の奥に行った。

「話というのはだね」

警官は言い出した。

「実は大家さんの都合ですなる荘を開けてほしいんだ。」

これは弱った。事件を解決するためにしばらくあすなる荘に住もうと思っていたのに追い出されてしまうのか？

そういうわけにはいかない。適当な嘘をついて残らなければ。

「ふぎけるな！両親は海外旅行に行ってるんだぞ！金のない俺はホテルに泊まることも出来ないんだぞ！俺にホームレスになれとでも言うのか！」

犯人扱いに対する慰謝料もスルーこそしたが気に入らない。俺はここぞとばかりに声をあげた。

「君にはすまないと思ってる。代わりの住居を用意した。しばらくならそこに住んでも構わない。あすなる荘は明日の朝までに空けてくれ。」

そういうと警官は俺に鍵と住所の書かれたメモを渡した。

俺は1日動きっぱなしで疲れていたので定食屋に行くことにした。ちよつと夕食にいい時間だ。

前は定食屋も鍵を閉めて俺を入店拒否していたが噂の回るのは早いらしく店に入ることができた。

定食屋の飯はうまかったのだがどうも女将の顔が浮いていない。昨今の不景気で財政難なのだろうか？話しかけてみると

「最近、うちのダンナがどうも元気なんだ。それになんだか香水の臭いもするんだがねえ」

と言っていた。定食屋の主人は浮気でもしてるのか？

まあ俺には関係無いがな。

そして俺はあすなる荘に帰り長い1日を終えた。明日には引越したがな。

狭い部屋とはいえ交番で寝るのは違うな。

久々にゆつくり寝た俺だったが起きたら引越した。

まあリュックサックが一つだけだからな。いつもと変わらないんだが。

俺はさつさと荷物をまとめて新しい住処に向かった。

紙を見たときに引つかかっただけだが、まさかだな。

それは例の事件が起きたアパートだった。

「メゾン壱剋」

むだにかっこいい名前だ。住む部屋は例の事件の隣の部屋。偶然だと信じたい。

一旦、荷物を部屋に置いたため入る。

部屋はあすなる荘より広い。生きていくに不自由はしないだろう。

ま、事件を解決するまでしかこの町に残るつもりは無いがな。

とは言え事件の全貌はまったく分からない。ただの物取りなのか？

俺は事件の様子を詳しく聞くために交番に行こうとした。

ドアを開けて一歩、外へ出ると聞いたことある声が聞こえてきた。

「みくるく。俺はお前に夢中だ。もう駆け落ちしたいくらいだ。」

そこにいたのは男女二人だった。定食屋の主人と見知らぬ女だった。俺は定食屋の主人の不倫現場を見てしまった。

「……………!?お……お前は昨日の……………!?」

客だぞ。お前呼ばわりか……………。揺すってみるか。

「ははーん。オカミが言ってたのはこの事か……………」

「たっ、頼むー!この事は黙っていてくれ!」

「えー。どうしようかなあー。」

「うちのメニューは全部タダにしてやるよ。それなら文句はねえだろ?」

「まあ……………な。」

「じゃあ頼むべ!」

これから食費の心配は無いな。

さて、俺は交番に行くとしよう

交番にはいつもの警官しかいない。

「何か被害者のことを教えてくれないか?俺も事件の捜索に協力したい。」

「そういうことなら仕方ないな。」

俺は被害者の情報を聞いた。警官も俺を疑ったことを悪いとは思っているようだ。

警官からの情報をまとめると

・ 50代の夫婦

・ 毎日、夫婦喧嘩が絶えず公園で喧嘩して通報されたことも

・ 夫は逮捕歴あり

ということだ。夫婦喧嘩ならまあどちらかがどちらかを殺してから自殺という可能性もあるな。

近隣住民に迷惑がかかっていたということは近隣住民が殺った可能性もなくはない。

可能性は広がったな。というか何故夫婦喧嘩が絶えなかったんだ?夫の稼ぎが悪かったのか?逮捕歴と関係してるのか?

うん、なるほど、分からん。とりあえず腹ごしらえだ。警官としゃべってるうちに時間はいい感じにお昼時だ。

定食屋に入ると主人が暖かく迎えてくれた。

「へいらっしやい！おおあんたか！特別メニューだ！」

主人はそういうと値段が書かれていない特別なメニューの紙を渡した。

ん？このメニューに定食が何一つない。全部安いサイドメニューだ。俺はこの程度では誤魔化されない。オカミの元へ行つた。

「なんでアンタは全部無料なのかね？最近、主人の様子がおかしいよ。アンタ、なんか知ってるんじゃないかい？」

「オカミ……実はですねえ……」

すると主人は

「あ！！メニュー少ないから怒ってるんだろ？すまねえ」

と通常メニューの値段がすべて書かれていないバージョンを渡してきた。

全メニューが無料となればウハウハだ。俺が一番高くて普段は絶対に頼めない「うな重定食」を頼んだ。

定食屋から出た俺はもう一度、手がかりを探すためアパートに戻った。いわゆる聴き込み調査だ。

事件現場とホームレス

定食屋から出た俺はもう一度、手がかりを探すためアパートに戻った。いわゆる聴き込み調査だ。

「……ということでその日の午後11時ごろって何かあったかご存知ですか？」

「いえ……たदैいつものように夫婦喧嘩していたようです……」

1階に住んでいたおそらく大学生であろう女性はそう言った。どうもこのアパートにはその女性と階段下にホームレスのオジサン、定食屋の主人の不倫相手しか住んでいないらしい。ホームレスのオジサンに話を聞くとしよう。

「すみません、ここで起きた殺人事件について教えていただきたいのですが……」

「ああ？なんだ？」

見るからにヤバそうだ。

「いえただ殺人事件について教えていただきたいのですが……」

「……知らねえな。」

ん？何か隠しているのか？

「いや、この上の階で起きたんですよ。なにか些細なことで良いから教えてくださいよ？」

「知らねえモンは知らねえ。」

「何か隠してますかな？」

「……いくら払う？」

オジサンは情報を要求しはじめた。仕方ない、俺は適当に財布の中の金を渡す。するとオジサンは語りだした。

「まあ惨めな話だ。俺はよ、この町の地下のあるところにある非合法なパチンコ屋の常連だった。まあそれでパチンコに溺れた俺は家も金も全部失ってこうなったんだ。」

なるほど、確かにあまり人に話したいような話題ではないな。

「あ……事件の日だったか？実はな、情けない話だが時折、大家がここにいたら邪魔だからと俺を退かせるんだ。まあ俺はすぐこの階段下に帰ってくるんだがな。で大家が警察に言ったらしい。あの日は刑事が来て退くように言われてな。仕方ないからあの日の夜だけは別のところで寝た。朝帰ってきたらビックリだ。事件があつたらしいからな。ということでは事件については本当に何も知らねえ。分かつたらとつと立ち去ってくれ。」

何か隠してる気がする。そもそも刑事が来て退くように言うというのもおかしい話だ。とりあえず保留にしておくか。定食屋の主人の不倫相手はホステスをしてるらしく昼間はいないらしい。

とにかくホームレスのオジサンは怪しいと言うことだ。だがそれにしても動機が不明だがホームレスということを考えればただの物取りだと考えても話は繋がる。ほんの少しではあるが事件の真相を掴んだ気がする。

明朝。

いや正しくは寝坊したお陰でもう昼というには微妙な時間だったが。

俺は足早に交番へ向かう。

「今度は事件現場について教えてほしいのだが」

「はあ……またかね。犯人が分かったら教えてくれたまえ」

「なんかちよいちよい上からだな。」

「本官は警察官だぞ！捜査上の情報はむやみやたらにばらさないでくれよ。君は事件の関係者だから教えるだけだ！」

世に言うツンデレか？まあ冗談はさておき今度は現場についての情報を聞いたわけだがホームレスの物取りだと思っていた俺は意表をつかれた。何一つ盗まれておらず物取りではないらしい。謎だ。

事件についてもふりだしに戻ってしまった。いや、何かヒントはあつたはずだ！

何だ？分からない。

俺はとりあえず交番を後にして定食屋に向かう。

定食屋には例の主人はおらず若い男が立っていた。息子だろうか？

女将に話を聞く。

「やっぱりあの男、浮気してたのよ！」

やっぱりバレたのか。主人よ、悪事はダメだぞ。

「で、問い詰めたら今朝にはいなかったわ。なんて男なのかしら」

ほう、主人は夜逃げしたのか。もうタダ飯は食えないのか？

俺は息子と思われる若旦那に定食を注文することとした。まあもともと安いからな。タダではないかもしれないのが残念だがまあいいだろう。

「ああ、アンタか。噂には聞いてるぜ。うちの親父がお世話になったみたいでな。お前さんは特別料金だ。」

という若旦那はメニューを出した。なんということだ。値段は通常の10倍だ。タダより怖いものは無いとはこのことか？

ん？そういえば被害者夫婦は毎日のように喧嘩していたんだよね？原因は？まさか被害者夫婦も不倫か？

見つからない容疑者

そういえば被害者夫婦は毎日のように喧嘩していたんだよな？原因は？まさか被害者夫婦も不倫か？

だとしたら不倫相手が怪しいよな……。何か引つかかっていたのはこのことか！

俺が一番安いのにくそ高いおにぎりを頼みさつさと食べて交番に情報収集に行った。

交番に行くといつも警官ではなくローズ刑事がいた。

「あら、やだ。あたしに愛に来てくれたの？」

会うの漢字がおかしいぞ。まあ華麗にスルーして本題に行く。

「あの……被害者夫婦に不倫とかそういうややこしい関係ってあったのですか？」

「んも〜！なんでそわなに勘が鋭いのよ！夫は不倫してたそうだが。男として最低ね。恥ずかしいわよ！」

いや、あなたは男じゃないでしょ、というツツコミは置いて。

夫は不倫か……。不倫相手について調べてみるか。いや、警察がもう調べたか。

「不倫相手はシロなんですか？」

「それがさあ〜不倫してる相手の人ってすんごいその人のこと愛してた訳でしょー。死んだなんて伝えられないわっ！」

「……………え。」

「あはーん。だからまだ何も言っていないのよ！」

「不倫相手って誰なんです？」

俺は刑事から不倫相手の電話番号を聞き交番で電話した。

そこから聞いた話では薄々、死んだことは知っていたらしい。というのも刑事が突然現れ不倫をすると新しく近々出来る法律で罰せられると言ってきたらしい。もちろん、そんな法律等ないと知ったのは別れてからで事件が起きたその日に縁は切ったという。

不倫相手もシロか……。ただ何かおかしい。そもそもその刑事が

何故現れたんだ？被害者夫婦の妻が雇った偽物の刑事か？謎は残るな。

俺はアパートに帰った。

明朝。

俺は既に事件の解決を諦めたい気分だ。だが諦めるわけにもいかない。警察の捜査は適当だし事件の真相は俺も気になる。こうなれば被害者の友達など少しでも疑わしきは調べるしかないな。

毎度お馴染みの交番に行ってみる。

「誰か被害者の関係者で何かありそうな人っていますか？」

ちなみに今はいつもの警官だ。

「ふうーむ。また君かね。事件の捜査はありがたいが犯人は見つかるのか？本当は君が犯人じゃないのかね」

「失礼なことを言うな。で、いるのか？」

「本官もそこまで把握しているわけではないからなあ……。あ、不倫の件でか……。じゃなくてローズ刑事から聞いた話なんだが最近では妻は夫の不倫に愛想尽かせて離婚も考えていたそうだ。そのために実は弁護士と相談していたらしい。だがその費用がすぐには用意できなかつたらしく友達に借金してたそうです。」

「金銭トラブルか……。？」

「金銭トラブルがあつたか分からないのですが……。調べてくれると助かります。」

俺はその金を貸した友人とやらに会いに行き話を聞くことにした。金銭トラブルは事件の動機としてありそうだしな。

その友人とは狂乱施策亜さんと言うらしい。

「なんかあまり聞き慣れない名前だな……」

そう思いながら俺はその方の家で話を伺った。

ほんの少しよもやま話をしたあと俺は本題に入った。

「被害者の方にはいくらほど貸していたんですか？」

「二百万円貸しました」

「それって結構な額じゃ……。トラブルとかもあつたのでは？」

俺は表向きは貸した金が消えたことに同情するような感じで相手がボロを吐くのを待つことにした。

「大きなトラブルはおきていません」

「……どうしてですか？」

「友人が殺されてしまつて、私も子供が居るのでお金が必要になつてしまい……どうしようか迷っている時に刑事さんが友人に貸していたお金を返してくれました」

「は？ケイジさん？」

「はい。『事件を未然に防げなかつた警察の責任だ』と……。」

「その刑事さんはどのような……」

「名前覚えてないんですけど黒髪で短髪の男の方でした。」

ローズ刑事ではないようだ。だがなぜ刑事がそんなことにまで首を突っ込んでいるんだ？一握の疑問を残し狂乱施さんに別れを告げた。どうやら彼女もシロらしい。

弱つたなあ……。どの証言も本当ならば事件のヒントが見つからない……。

いや待て。何か重要なワードがあつたような……？気のせいか。ここまでの証言で何か共通するような事を見落としている気がする。何だ？俺は何を見落としているんだ!?

一人目、いつもは現場近くにいたホームレスの証言では事件の晩には追い出されて事件は知らない。

二人目、被害者夫の不倫相手は関係が事件当日には切れていた。

三人目、被害者妻が金を借りていた友人は事件を知つてすぐに金が返つてきた。

誰も怪しくないと言えば怪しくない。

アリバイは調べようと思えば警察が調べてくれるだろう。

ん？今のまとめに何か抜けてるような気がする。なんだろう。確か、一人目、二人目の時にちよつと気になったような気がするんだが……。

まあそのうち見つかるか。

大家さん

俺はアパートの管理人にも会ってみることにする。警察が調べてないだけで家賃滞納などのトラブルがあったかもしれないしそれ以外のトラブルも起こっていて不思議はないだろうからな。

よくよく考えたらアパートの大家がホームレスを退かせれば犯行はしやすくなる。動機は分からんが大家なら犯行は可能だ。

そう考えながら俺は大家宅に来た。

ちなみに大家はアパート近くの一軒家に住んでいる。アパートの大家は副業らしく普段はサラリーマンをしているらしい。

大家さんは事件のことについて調べてる旨を伝えると中に通してくれた。

俺は気遣いなど忘れて単刀直入に聞くことにした。見る限り嘘はあまりつけそうにない人間だからすっぱり聞いて動揺するようなことがあればすぐに分かりそうだからな。

「と、言うことなんだが……事件当日はどうしてましたかね？」

「家で寝てました」

「は？いや……えーと……事件のあったアパートの階段下にホームレスが住んでるのはご存知ですよね？」

「ええ。何度か、追い払ったこともあるのですが……」

「それでもすぐに戻ってきてきてキリがない。だから警察に頼んで追い払ってもらったんですよ。それも事件当日に。それは偶然ですか？」

「警察？……そういえば、あの夜……いつも通り、追い払いに行こうとしたんです。そしたら、頼んでもないのに『私が、ホームレスを追い払って差し上げます』と言う人がいましたので、私は家に帰って寝ました。あれは、警察の方だったのでしょうか？」

「……え？いやホームレスの方が大家さんから通報を受けた警察が来たって……」

「確かに、あまりにも酷いようなら、警察呼ぼうとも考えましたが、ま

だ通報してませんか？」

「……………は？」

待て。話が噛み合わない。ということとはどちらかが嘘をついている……………ということだな。ホームレスは物取りもしていない、つまり嘘をつくメリツトはない。怪しいのは大家だな。

「正直、どう思ってたんです？被害者夫婦のことを。」

「まあ、あの夫婦のせいで、アパートにまた警察が捜査に來たりして評判は下がるし、正直あまり良く思ってます。それは、今もです。ですが殺したりは、決してしません！大切な、収入源ですから」

「いや……………収入源って……………アパート持つくらいなんだし一件くらいそんなに……………」

「昔、宝くじに当たったんです。元々、私が勤めている会社は、給料が高くない。なので、収入を増やすために、アパートの経営を始めたんです。ですから、住人は一人でも多くないと、私の生活が苦しいんです」

なるほど。確かにNOTO6の一等配当金をあのアパートと、この家に使えばいい感じに無くなるな。ということは大家さんもシロ？

だが待て。大家さんの発言からも俺は何か忘れてる気がする。そうか！

「さつき『また警察が捜査に來たりした』って言ってましたよね。『また』ってことは過去にもあったんですか」

「詳しいことまでは分かりませんが、以前も1度ありました」

それは耳よりの情報だ。そういえば警官も夫に逮捕歴があると
言っていたな。すっかり忘れていたが…………

どうせ万引きとかの軽犯罪だろうと思ってるまま流していたが
軽犯罪で家宅捜索などをするはずかないな。

これは一度、調べてみるか。俺は事件捜索の息抜きに夜に公園で行
われている夏祭りを見た。夏祭りというのはどこでも案外変わらな
いな。

公園の端に花束が供えられていた。何かあったのだろうか。翌日、
俺はその答えを知ることになる。

消えた凶器

明朝。

俺は軽く朝食を済ませ交番に向かった。交番に通う日課。今考えるとあまり良いものではない気もする。

「というわけだ。過去の逮捕歴に関して詳しく教えてくれないか？」

「本官はまだ警察官になる前の話だから詳しいことは分からないんだが……。どうも件の夫婦はその頃から喧嘩が絶えなかつたらしい。原因は夫の浮気癖。逮捕というのはその公園で夜に夏祭りをしてるだろ？その公園である日は喧嘩をしていた。しかも夏祭りだというのに。で不快に思った誰かが警察に通報をしたらしい。通報を受けた警官は公園に行ったが夫がナイフを隠し持っていた。警官はそのナイフにより殉職した。そのあとそれをみた住民によりまた通報が入り夫は妻に対する殺人未遂や殉職した警官に対する傷害致死、銃刀法違反の現行犯で逮捕された。これが本官が聞いてる夫の逮捕に関する事件の概要だ。」

「なるほど。わからん。」

「……ん。つまりだね、夫はナイフを持ち喧嘩していて止めに来た警官が亡くなったのだよ。」

「あ、そういうことか。」

言われてみれば昨日の花束はその殉職した警官に対するものだったのかもしれない。

「で逮捕された夫はどうなったんです？」

「いや、そこから先は本官も知らない。検察の管轄だからな。まあ簡易裁判所レベルではないから興味があるなら地方裁判所にでも問い合わせる過去のデータを調べてくれ。」

俺は事件の日時を聞いた。後で裁判所に行つて調べてみるとしよう。

「あ、そうだ。被害者夫婦に関してなんだが司法解剖の結果死因はナイフで刺されていたことだが犯人は被害者にとどめを刺すためにアスピックか針のようなもので被害者夫婦の肺を刺していた。夫は

ナイフで即死らしいが、妻は事件後数分は生き延びた。しかし肺を傷つけられたことにより酸欠で亡くなったことがわかった。針のような凶器はまだ見つかっていない。」

ほう。つまり凶器はまだ犯人が持つてる可能性があるのか。

俺は交番をあとにし地方裁判所に向かうべくバスに乗った。

運転手はいつかの心優しい運転手ではないか！向こうも俺のことを覚えてくれていたらしくミラーで俺の姿を見ると

「おおっ！元気してたか？」

と話しかけてくれた。

「ええ。おかげさまで。ありがとうございました。」

「んーだ。気にしなくていいっぺ。」

「一つ聞きたいんですが……事件の日は……」

「あれ？前にも言わなかったかな？例のマンションの前走る路線を運転してただ。」

「ですよ。何か怪しい人影とか見ました？」

「いや、見てねえだ。んだ、いつもはお客さんいねーのにその日は珍しくお客さん乗って来ただ。バスの防犯カメラは本社にあるけどかわい子ちゃんじゃなくて男だったぞ〜」

「……そうですか。近々、行かせてもらいます。真犯人が乗っていた可能性もあるんで」

「なるほど〜。何か分かったらまた言うだ〜。またバスに乗ってくれな〜」

俺はそんな会話をしながら裁判所までバスに乗った。

裁判所で俺は事件の日時の近くのデータを調べた。事件の数は多い。調べてるうちに日が暮れたがそれでも見つからなかった。見落とした？いやそんなはずはない。何故だ？

夜になっていたので俺は帰った。

事件データはどこにあるんだ？

翌日

俺はこの被害者夫が起こした事件の情報を探し地方検察庁に出向

いた。ここならあるいは……。

俺は起訴の記録をしらみつぶしに見たがやはり見つからなかった。まさか……不起訴？

確かに不起訴なら裁判されてないんだから裁判所探しても見つかるわけ無いな。

待てよ。不起訴ならデータも残って無いんじゃない？……。

どうしたらいいんだ？

かなり昔の事件だからな。新聞とかも探せない……いや、待てよ。事件の日時が分かっている。過去の新聞……もしかしたら！

俺は図書館に行くことにした。

ここなら昔の資料として新聞が保存されているはずだ。公園の夏祭りをめちやくちやにしたくらいなんだし探せばあるだろう。

俺は即行で図書館に行った。

事件翌日の朝刊の地方欄のさらに隅っこにターゲットはいた。

「男、夏祭りでナイフを振り回す。夫婦喧嘩が原因か？止めに入った金田真司巡査が殉職。」

その日の記事は警官から聞いた概要がほぼそのままだった。

亡くなった警官の名前が分かったがそれ以上の情報は得られなかった。

諦めず翌日、以降の新聞もチェックする。すると数日後の新聞の、やはり隅っこにターゲットはいた。

「夏祭りナイフ男。不起訴。」

俺は何らかの資料になるかと思い記事をコピーした。

夏祭りでナイフを振り回し警官を刺した現行犯で逮捕されていた容疑者だが検察の調べでこの男は精神病と認定。責任能力が無いことなどから不起訴処分となった。

とのことである。

まあこの亡くなった警察官の遺族は辛いだろうな。然るべき処罰を犯人は受けてないのだから。

とりあえず資料を探したりコピーしたりと熱心に捜査しているともう日が暮れていた。

帰りのバスもいつもの心優しい運転手さんだった。運転手さんは俺の顔を見ると

「営業所に、当日のバス防犯カメラ映像が見つかっただ。興味あるなら明日にでも営業所に見に来るだ？」

と言われた。ありがたいことだ。状況的に真犯人が乗った可能性が高い。明日は営業所行き確定だな。

帰ってから俺は資料をもう一度見直した。最大のヒントがあるよ
うな気がするからだ。何かこれまでと繋がっているものがある。俺
の勘はそう言っていた。

血塗られたアイスピック

明朝。

俺の勘の正体が分からない。とりあえずは朝食をすませた。

いつも朝食の後は交番に行くという嫌な日課が続いていたが今日は違う。バスの営業所に防犯カメラ映像を見に行くのだ。

警察の捜査が当てにならない以上、自分で調べるしかないからな。

営業所ではあの運転手さんが話を通していてくれたらしくスムーズに当時の映像が見れた。

はあ……

俺が甘かったな。

映像は画質が荒く怪しい人物の姿は見れたものの帽子を被っており顔までは確認できなかった。だが夜中にも関わらず終始うつむき加減で真犯人と言われれば納得はできそうな感じであった。

ただ手袋はしていない。夏に手袋までしてたら怪しまれるからだろうな。凶器のナイフからは指紋は検出されなかったそうだ。

「当日のバス、今日はお休みしてるから一応、見ておくかい？」

俺はお言葉に甘えバスも確認した。特に犯人らしき人が座っていた席周辺を重点的に。

結局なにも見つからなかった。横には非常ドアの操作器がある。

まあ何もないだろう。そうは思いつつ操作器の蓋を開けてみた。

カラン……

蓋をあけると何かが出てきた。開けちゃまずいものだったのかもしれないと思いつつ俺は落ちたものを見た。

……！こつ……これは……!!?

落ちてきて転がっているのはアイスピックだった。それもただのアイスピックではないらしい。確かに誰も見ないような場所にあるような時点で普通ではないんだが。それ以前の問題だ。

「……っ！血塗られている……」

多分、DNA鑑定をすれば被害者のモノだと分かるだろう。何より

柄の部分には犯人の指紋がべったりだろうな。俺は手袋をはめてアイスピックを持っていたコンビニ袋に入れた。ちなみにこの非常ドア操作器のフタは10年働いていて一回触れば多い方らしく当該バスもフタを開けたことは無いらしい。

さて、これを警察に持っていて鑑定してもらえば……

いや、待て。何故か警察に持っていてはいけない気がする。これまでもずっと引つかかってくる感覚だ。何に引つかかっている？

いや、待て。何故か警察に持っていてはいけない気がする。これまでもずっと引つかかってくる感覚だ。何に引つかかっている？

「アイスピックを警察に持っていてはいけない」

他の引つかかった証言は

「刑事に追い出された。」「警察の方に新しい法律が……」「刑事さんがお金を」

キーワードは……警察？

警察に俺は引つかかっているらしい。そりゃ犯人扱いされたからな。だがそれだけだろうか？まさか警察関係者が犯人？

いや、それだとホームレスやアパートの大家さん以上に動機が無いじゃないか。

それこそ誰も知らないような怨恨とかで……怨恨？

被害者夫に警官が刺されて亡くなった事件があったか。それと関係があるのか？

警察長官のような重大人物なら報復もあり得るがただの一警官だろ？その亡くなった警官に一警官以上の価値を持つとしたら血縁者、恋人、不倫相手くらいだろう。数十年前の事件で今頃だったら恋人と不倫相手という可能性はほぼ無いな。

見えた犯人像

その亡くなった警官に一警官以上の価値を持つとしたら血縁者、恋人、不倫相手くらいだろう。数十年前の事件で今頃だったら恋人と不倫相手という可能性はほぼ無いな。

うーん……。血縁者か……。

そもそもこの警官も俺からしたらただの他人だしな。その血縁者なんて分かるわけが……。ん？　そういえば新聞には名前が載ってたよな。確認してみるか……。

亡くなったのは金田真司という巡査で事件当時、40歳くらいらしい。と考えると金田真司の親はだいたい80歳くらいか？　それって犯行は難しいよな……。

子がいたとすればだいたい30歳くらいか。犯行は可能かもしれない。というか十分可能だ。

結婚していれば妻の可能性もあるな。

あとはその金田真司の子を探す……。

どっかで似たような名前を聞いたような気がするんだが。

俺はなんとなくの記憶を頼りに交番に行った。交番にはローズ刑事がいた。

「あの……。ローズ刑事は家族って……。？」

「あらう。やだ。どうしたのかしら？　もしかしてあたしと結婚したいわけ？　んふ」

「いや……。そうじゃなくて……。事件の捜査にも疲れたわけでもちよつとお話したいかなって思いました。」

俺は適当な嘘をついて誤魔化しながら話を進めた。

「いや……。俺も……。刑事になりたいと思つて……。どうして刑事になろうと思ったのか聞かせてもらいたくてな。」

「そんなの適当よ。ただお給料良さそうじゃない？　警察つて。だからよ。」

なんか嘘をついてるように思える。

俺の推理が正しければ本当は別の目的があるはず。

「へえーそうなんですか。あ、警察手帳を見せてくださいよ。」

「あら？そんなに懂れても仕方無いわよ？現実なんて大したことないわ」

そう言いながら見せてもらった警察手帳は「金田真一刑事」としてのものだった。例の新聞記事の金田真司巡査の写真と似てるような気もする。年齢的に考えて金田真一は金田真司の子だとも言えなくはない。だが本人に聞くのはさすがにまずいだろうか。

そう思った俺は一旦、アパートに帰り流れを整理した。

犯人として可能性が高いのは奴だな。

確かに盲点だった。奴をまったく調べてなかった。だが奴が犯人で俺の推測通りだと動機も明白だ。翌日、俺はもう一度、証言や手ばかりを確認してみることにした。

俺は珍しくメモ帳を取りだしここまでの証言とその目的を推理しまとめた。

1 ホームレス……刑事によって追い出された↓事件の目撃を阻止

2 夫の不倫相手……事件前に関係を絶つよう言った警察↓新たな怨恨を阻止

3 妻の友達……金銭問題の解決した刑事↓新たな怨恨を阻止

4 アパートの大家さん……刑事がホームレスを追い払う↓現場に行かせない

なるほど。犯人は事件を見せないだけでなく犯人に対する怨恨などを生まないためしている。つまり事件の関係者が事件の真相を知らなくても良いようにして事件を詮索させないようにしているわけか。だとすれば俺をほぼ犯人扱しなかった理由も見えてきたな。つまり犯人は事件を関係者の記憶から消し個人的捜査はさせないようにした。あとは犯人の権力を使えば捜査は進みにくくなる。

だが俺はそんなことで真実を逃すような男ではない。

もう証拠のアイスピックも見つかった。言い逃れは出来ねえぜ、犯

人さんよ。

事件の真相

俺は推理を警官と犯人にぶつけることにした。

だが待て。警官と犯人に同時に聞かせれば問題ないが犯人にだけ言うとうなるんだ。

万が一、犯人が逆上した場合、真相を暴いた俺が犠牲になってしまう場合もある。

だが犯人に聞かせず警官のみに聞いた場合、あの警官は俺を疑ったまもらしいから事実を確かめてもらえないかもしれない。

つまり俺はどうやってでもいつもの警官と犯人に同時に推理を聞かせなければならぬのか……。

ふむ……。とりあえず交番に行って警官だけでも捕まえておいて警官と犯人を会わせるか。

そう決めた俺はもう事件の推理も完了していてそろそろ家に帰ってたかった。宿題をしないといけない。

夏休みももう終盤だ。

そして……この事件も終盤、短かったが世話になったこの町にはもう別れを告げよう。

俺は荷物をまとめて家を出た。暫く続いていた朝の交番通いも今日が最後だ。

交番にはいつもの警官はおろか誰もいなかった。これ交番の意味があるのか？

仕方がないので俺は久々に定食屋に行った。

主人は家出していたはずだったがいつの間にか帰ってきていた。女将の話では主人は結局、土下座して泣き付いてきたらしい。そんな主人は現在、家から出ることは許されないそうだ。

主人も帰ってきてタダ飯……という訳にはいかなかったが定価で召し上がることができた。こちらの浮気事件は俺が介入することなく解決したわけだった。

さ、仕切り直しだ。

殺人事件の解決をするため俺はもう一度、交番に行った。

交番の奥から都合良く警官とローズ刑事が出てきた。
警官は俺を見ると

「今度は何かね……今、刑事と事件について話していたんだが……」

ほう。それは面白い。言われてみれば事件に対する警察の見解を一度も聞いたことが無かったな。俺は自分の推理をぶつける前に警察の見解を聞くことにした。

「事件は不倫に愛想を尽かせた妻が夫を刺した後、自殺した……ということだ。」

「え？なんかそれって矛盾点がやたらあるんじゃない？」

俺が問うと警官は刑事には聞こえないくらいの声にして

「実は本官も違和感を感じている……だが刑事には逆らえないよ」

と漏らした。仕方無い。俺の完璧な推理を聞かせてやるか。このままでは事実は何の中だからな。

「いや……俺は事件の真相を言いに来たんだが……」

「何!? 本当かね? 刑事!! ちよつと来てください!」

交番内にいるのにそんな大声で呼ばなくても……。するとトイレに行っていたらしいローズ刑事が現れた。

「そんなに大声で呼ばなくても聞こえてるわよ。あ、鈴木ちゃん? 事件の捜査してくれるのはありがたいんだけどあんまり詮索し過ぎない方が良くわよ。犯人が逆上して命を落としたりするかもしれないから・ネ」

何を今さら白々しいことを……。

「俺……。分かつちやっただんです……。犯人が」

食い付いてきたのは警官だった。

「何!? 本当かね!? で、誰なんだ!?!」

こいつには犯人扱いや安過ぎる慰謝料、若いくせに高圧的な態度に腹が立っていたからな。ちよつとからかってやろう。

「犯人は……。俺だ。」

「何!? やっぱりか……。最初から怪しいと思っていたんだよ。そもそも

現場で本官が身柄を確保したときから……」

刑事を前に手柄が欲しいのか警官は言い訳する小学生のようにウダウダ言ってるやがる。

「なーんてな。へっ。嘘だぜ。」

「……本官を侮辱しているのか!? 実際に犯人は誰やねん! ワレそれもパチやったら公務執行妨害でパクったるさかい覚悟せえよ!」

見栄はるからそうなるんだよ。ってか、こいつ感情が高ぶると訛るのか……。

「順を追って説明してやる。」

俺は事件の流れを説明してやることにした。「事件は夜起きた。だがその数日前から……いや正確には数年前から計画は進行していたのだろう。犯人は被害者夫の不倫相手を夫と引き離し不倫相手に事件のことを知られないようにした。そして別れる話し合いで夫は帰宅が遅くなり玄関先で夫婦喧嘩が起きるように仕向けた。そして別れたその日に現場のホームレスといつも追い払いに来る大家さん来ないようにして準備完了。犯行を誰にも見られずに行いそのままアパート前の双電交通バスに乗り第二の凶器であるアイスピックを誰も触らない非常口操作器の蓋を開けその中に凶器を隠した。その翌日以降、友達へ借金を肩代わりして返済したりして事件の余計な詮索をさせず、事件の詳しいことを時が経てば忘れるようにした。これが事件の全貌だ。」

犯人は表向きでは平静で聞いているが内心ではびくびくしてるだろうな。

警官はまだ俺を疑っているのか俺に聞いてきた。

「確かに筋は通っているが……結局、犯人は誰なのかね?」

それはやはり気になるよな。

「それは……ローズ刑事……いや、そこにいる金田真一です。」

場の空気が凍りついた。まあ当然だよな。

その北極のような空気の中で最初に動いたのは犯人、金田真一だった。

「あら、やだ。また冗談かしら？もーっ。あたしたちも忙しいのよ。からかうんだつたら帰ってちよーだい」

「残念でしたね。生憎だが冗談では無いんですよ。それはロー……いや金田真一……あんたが一番詳しく知ってるはずだ」

「もーっ。さつきから金田金田金田金田つてその名前で呼ばないで！だいたい何を根拠に言ってるのよ！」

「やれやれ……それも俺が説明してやらなきゃならんのか……」

「本官も詳しく話を聞かせてほしい。」

「仕方無いな……。以前、夏祭りの公園で起きた警官が刺された事件……。すべての発端はこれだ。ここで刺された警官は金田真司さんという。」

「……え？それってもしかしてローズ刑事の……」

本人はまだ言うつもりは無いのかうつむいている。

「ああ、おそろくな。で、刺したのが今回の事件の被害者夫だ。」

「……え……怨恨……？」

「そうなるな。だが昔の事件では被害者夫は精神病と診断され法で裁かれることは無かった。」

俺はだいたいの推理をぶちまけてやった。

するとローズ刑事は何かを思い付いたかのように言い出した。

「……！どこに証拠があるのよ！全部、憶測に過ぎないわ！証拠をだして見なさいよー！」

やれやれ、ここまで事実を認めないとはな。

俺はとつさにスーパールの袋に入れて置いた血塗られたアイスピックを取り出した。

「……っ！これは!?なんで黙っていたんだ!?!」

「いや……犯人の手にみすみす渡すわけにも行かないでしょ。事件当日、バスに乗った時には手袋は外していた。つまりこのアイスピックには犯人の指紋……そして被害者の血のDNAがあるはずだ！さあそろそろ認めたらどうだ？」

するとローズ刑事だった殺人犯は敗けを認めたのか長い金髪を

引つ張った。すると金髪が山のようにづり落ちた。ウィツグだったのか……

「フフっ……。その通り……。殺ったのは俺さ。すべて話すよ。」

意外にイケメンだな……。というか何でオカマをやめたんだ？

「あんたの言う通り。あの事件で俺は父親を失った。当時幼かった俺は母親から父は浮気して駆け落ちしたと聞いた。男は最低だと思っただ。そうして俺は高校生になるまで父は浮気して駆け落ちしたと思いつきながら生きてきた。その頃には男であることが恥ずかしいくらいにな。高校を出たらニューハーフになろうと思つてたくらいだ。」

なるほど……。だからオカマだったのか。

「だがな高3の夏……。志望校も決め友達と勉強のために図書館に行つた日のことだった……。友達に事情を言うつとそいつは図書館に保存されている新聞を探し出して俺に見せてくれた。その夜、母親に聞いて俺は初めて事実を知つた。父をずっと恨んできた俺が間違いだつたことも犯人が罪を償わずのうのうと生きてることをな。俺はその時、警察官になつて復讐してやろうと考えた。それから警察官になるために日々猛烈に努力し晴れて警察官になつた。警察官になつてから仕返しした後を考えて刑事に昇進するよう頑張りカモフラージュのために普段の勤務はオカマのふりをするこにした……。まさかこんなに早くバレるとはな。」

その時だつた

どこからか足音が聞こえてきた。

「やれやれ……。そんなことなら私を殺せば良かったのに……」

何者!?

「やれやれ……。そんなことなら私を殺せば良かったのに……」

何者!?

振り返ると眼鏡をかけた白衣のオジサンが立っていた。

事件も大詰め。空気を読まないタイミングだな。警官もそう思つ

ていたらしく

「……あんた誰ですか？今、取り込み中なんですが。」

と怒り気味だ。今回だけは警官に味方してやってもいい。

「あ、申し遅れました。私は精神科医師会『流盛会』会計監査課副課長補佐兼『流盛会』労働組合組合員の村山総合医院精神科の医師、水野です。」

えらく長い肩書きだな。長いだけでそんなに大したことはないよ
うな気がする。それは置いといて……

俺はさっきの発言の意味を聞き直すことにした。

「今の『私を殺せば良い』とはなんだ？」

「まあそろそろ年貢の納め時だと思いましてね。自白だけでは証拠にはならないということでしょうに来たのですよ。」

「水野先生と言ったか？どういう意味だ？」

「過去のあの事件。当時、医師になりたてホヤホヤの私が容疑者の診断書を書いたのさ。だが実際には容疑者の妻から賄賂を受け取っていたんだなこれが。本当は精神病なんかじゃなくて責任能力もあつたんだよ」

笑いながら堂々の犯罪宣言。頭大丈夫なのか？この医師を精神科に連れていくべきじゃないのか？

まあ疑問はぶつけることにしておこう。

「なぜ？なぜこのタイミングなんだ？なぜ今頃になって言いに来たんだ？」

「いやあ、言ったところで証拠も無いし証人も亡くなったからね。でも隠し通すのは苦手だから言いに来たんですよ。まっ、刑事さんも復讐が成功して良かったじゃないですか。私もあなたのお陰様で過去の件で咎められることもありませんしね。」

笑いながら余裕綽々で水野医師は言う。

何かキレイな音がした。俺と警官はそんな気がした。

―バンツ―

一発の銃声が鳴り響いた。

あつけらかんとしてしばらく（実際には数秒）固まっていた俺たち

だったがやがて金田刑事が

「……お望み通りにしてやったよ……」

とボソリ……。銃声の発信源は刑事の拳銃らしい。

水野医師が頭から血を流し倒れていた。

警官が

「……！金田真一！現行犯で逮捕だ！」

と叫び取り押さえにかかる。

俺は一応、救急を呼んだが水野医師は即死だったらしい。

その場で刑事は警官に取り押さえられていた。刑事は抵抗する様子もなかった。

もう何もかも諦めたという感じだ。

俺もこんな形で終わるとは思わなかったぜ。

そのあとどうなったかを話しておこう。

逮捕された刑事は即懲戒免職になった。

俺はその日は本来の家に帰ることができた。久々だが安心するものだ。

数日後に警察から呼び出しがあり水野医師銃殺の証人としてまたあの町に行った。今回は交通費も警察持ちだったから楽だな。

最初の夫婦殺人に関しても俺の推理を基に警察は捜査することに金田元刑事は殺人の容疑で再逮捕され3人を殺害したとして裁判の結果、無期懲役となった。

俺はというと事件の捜査に協力したとして感謝状と金一封が贈られた。金一封の中身は数ヶ月で「ヤバイ棒」という御菓子になって消えたんだが。

結局のところ金田元刑事の復讐劇は本来の目的とえば成功したが事実、人が亡くなっているのだ。

自分の片親を失ったからと言って許されるわけではない。金田元刑事には罪を償ってほしいと思う。

俺は事件から帰ってしばらくは恐怖で手が震えて宿題も手につかなかった。文化祭の一件で免疫は付いたつもりだったが目の前でや

られては多感な高校生には辛いぜ。

ちようど1年ほど前には色々俺は推理がしたくて事件を探し回っていたが本物の事件の後、感想を述べるとしたら、「あの頃の俺、事件は一回で十分だぞ」と言ってやりたい。